

フューチャー・デザインによる持続可能な社会づくりの支援



キーワード

フューチャー・デザイン、持続可能な社会、まちづくり、環境教育

○取り組んだきっかけ

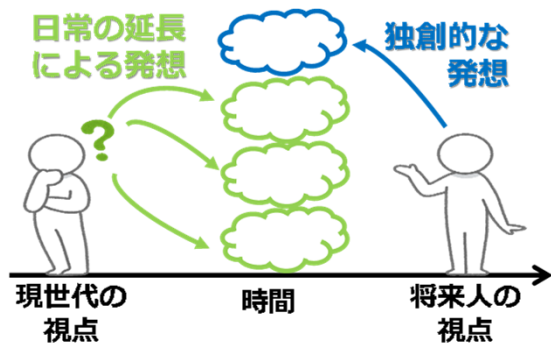
持続可能な社会の実現に向けた課題の多くは、現世代と将来世代の利害対立に基づいています。代表的な課題である地球温暖化を例にとれば、現世代は多くのエネルギーを消費した方が豊かに暮らすことができますが、その行動によって、将来世代の豊かな暮らしを奪い、生命が脅かすと予測されます。しかし、今ここにいない将来世代は、それを訴えることができないため、現世代は将来世代を配慮しない行動を続け、現世代と将来世代の不公平はなかなか解消されることがありません。持続可能な社会の実現のためには、現世代が将来世代に配慮した行動を取るために、将来世代の権利を守るための仕組みを現世代の意思決定プロセスに組み込む必要があると考えられます。

○活動の目的

このような課題に対して、当時の大阪大学の研究者らが中心となり2012年頃から検討が始まったのが、「フューチャー・デザイン」¹⁾と呼ばれる将来世代に持続可能な社会を引き継ぐための仕組みや社会システムのデザインと実践の取り組みです。その具体的な手法の一つは、将来の社会に向けた方向性や目標を検討する際に、まず将来の社会のあり方とその中で自分が生活していることをイメージし、将来人になりきった立場（これを仮想将来世代と呼びます）から現在取り組むべきことを考え、意思決定を行うものです。これによって、将来世代の立場を疑似体験することができ、通常の議論のプロセスと比較し、より持続可能な選択をすることができると考えられています。フューチャー・デザインは、現在では多くの研究者が手法の開発や効果の検証を進めており、また実際に様々な自治体や企業で将来計画づくりに活用され始めています。

○具体的な内容

ここでは、原圭史郎教授（大阪大学）と筆者らの研究グループが大阪府吹田市と共同で平成30年～令和元年に行ったフューチャー・デザインを活用したワークショップについて紹介します²⁾。このワークショップでは、その当時策定が進められていた「吹田市第3次環境基本計画」の内容について、市民および市職員が参加し議論しました。5つのグループに分かれた28名の参加者は、予め市職員が用意した計画素案について、現世代と2050年の将来を想定した仮想将来世代の立



場の両方の立場から評価し、改善案を提案しました。現世代の視点で行った議論では、エネルギーや廃棄物の問題について、日常感じている意見や疑問を出し合う形で議論が行われた一方、仮想将来世代の視点からの議論では、2050年の社会では再生可能エネルギーや資源リサイクルシステムが普及し、様々な科学技術の発展の下で生活スタイルが変化していることを前提として、現世代視点とは全く異なる意見が多く出されました。具体的な例として、仮想将来世代の視点から見た時に、計画素案に含まれていた「限りあるエネルギーを大切に使う低炭素社会への転換」という目標は、化石燃料使用を前提とした考えであるので変更すべきと評価され、これを反映して実際の環境基本計画では「再生可能エネルギーの活用を中心とした低炭素社会への転換」という目標に修正されました。このように、仮想将来世代の視点の導入は持続可能な視点からの気づきを与え、現代人が無意識に取る行動を見直すきっかけになると言えます。

○期待される効果

人は無意識のうちに、常識や思い込みに縛られて行動しており、そのまま将来のことを考えても日常の延長を抜け出すことはとても困難です。一方、将来世代の視点に立つことで、常識や思い込みにとらわれない本質的な答えに近づくことができます。フューチャー・デザインを導入した議論では、前向きに活発な議論が行われ独創的なアイデアが多数出ること、達成困難でもより将来社会にとって重要な選択をすることなどがわかりつつあります。今後は、フューチャー・デザインの教育効果に着目し、環境教育への応用も検討したいと考えています。

参考文献

- 1) 西條辰義(編著):フューチャー・デザイン 七世代先を見据えた社会,勁草書房, 2015
- 2) Hara et al.: RIETI Discussion Paper Series 22-E-045, 2022

連携先

大阪大学大学院工学研究科附属フューチャーイノベーションセンター 原 圭史郎 教授

教員名 黒田 真史

所属学部・学科 社会環境学部

・社会環境学科

職位 准教授

